

Title	今田 高俊著 『自己組織性：社会理論の復活』
Sub Title	Takatoshi Imada, Self-Organization the Revival of Social Theory
Author	有末, 賢(Arisue, Ken)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1989
Jtitle	法學研究：法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.62, No.4 (1989. 4) ,p.156- 163
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19890428-0156

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

紹介と批評

今田 高俊 著

『自己組織性——社会理論の復活——』

(一)

現在、「社会理論」という言葉の持っているある種の「神通力」は確実に失なわれてきているように思われる。もちろん、いつの時代にも、その社会の全体性をトータルに把握しようとする「社会理論の試み」が、その目的を達成したことなど、かつてから皆無であったのかもしれない。しかし、筆者自身が社会学の領域に足を踏み入れた一九七〇年代初頭の頃には、「社会理論」という言葉が持っていた、ある種独特の「熱っぽさ」といったものが感じられたのだが、今は、おそらく多くの人々から、「社会理論」という分野の存在すら視野欠落に到っているのではないだろうか。

ここで取り上げる今田高俊『自己組織性』の冒頭では、「現在、社会科学は言語喪失の状態に陥っている。(まえがき一頁)と端的に断言されている。そして、「本書の課題は、自己組織

性をキー・ワードとして社会理論を復活させることにある。」(同ii頁)と宣言されている。この二つの文章に象徴されるように、本書は、非常に重要な課題に対して、著者が真正面から取り組み、明確に、そしてわかりやすく述べようと意図されている。それは、近來の「社会理論の迷路状況」をつき破って、十数年前に感じた「熱っぽさ」が見事に蘇り、さらに、その混濁とした「熱っぽさ」が冷静に整理されていくような気がしたのである。私自身が「自己組織性をキー・ワードとして社会理論を復活させる」仕事を、今後引き継いでいくわけではないにしても、読者に対して、何らかの意味で「社会理論の復活」を確信させるような、説得力を持った好著であると言える。

この著作は、方法の部と理論の部から成っていて、第一部「変換理性の科学哲学」と第一部「自省的機能主義の理論」というタイトルでまとめられている。方法の部は四章立て、理論の部は三章立てになっているが、最後の第七章「社会理論の復活」は、ポリューム的にも重厚で、理論モデルをまとめている形になっており、その意味でも方法の部と理論の部は、ほぼ対称形になっている。また、図表の作成のしかたも、〈方法モデル1〉から〈方法モデル5〉と〈類型モデル1・2〉を経て、〈理論モデル1〉から〈理論モデル5〉へ到る展開も、視覚的・図形的対称によって理解の助けとなっている。

それでは、著者の言う「変換理性」とは何なのか、そして「自省的機能主義」とは。まず、方法の部から紹介していくこ

とにしよう。

(一)

第一部「変換理性の科学哲学」では、次の四章構成になっている。

第一章 不確定な自己組織性

第二章 ロゴスの覇権争い

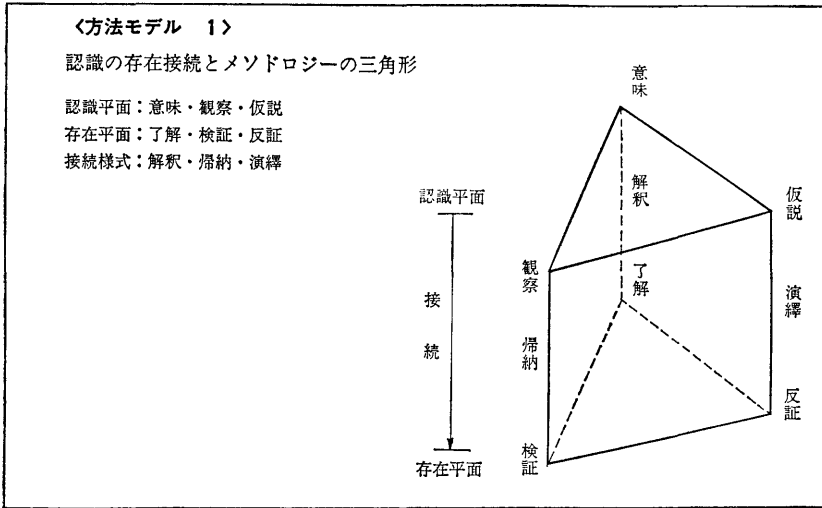
第三章 理性帝国の転覆

第四章 理性神話の脱構築

まず、第一章において、本書のテーマである「自己組織性」について定義し、その理論的関心と現実的関心の双方から課題が設定される。そして、近代科学の方法理性を支えている二項対立を、彼の言う「メソドロジーの三角形」へと組み換えていく「変換理性」のアウト・ラインを描き出している。第二章においては、近代科学の「理性帝国」を形成した仮説演繹法と観察帰納法についての「ロゴスの覇権争い」を検討し、どちらも「自己組織性」に対しての挑戦においては、重大な欠陥があることが指摘される。そして、第三章では、これに対して第三の意味解釈法による「理性帝国の転覆」が企てられるが、これに対しても批判的検討が展開される。第四章においては、これまでの演繹・帰納・解釈の理性神話を二項対立をエポケーすることによって「脱構築」し、メソドロジーの三角形を回転させることによって「変換理性」の科学哲学を提起している。

今田は、「システムがある環境条件のもとでみずからの組織を生成し、かつまたその構造を変化させる性質」(六頁)を総称して「自己組織性」という概念を提起する。そして、「人間社会は、再組織の仕方が状況とその認識に依存してさまざまでありうる可能性を残した、不確定な自己組織性の世界」であり、「確率的に不確定なものではなく、根底的に不確定」なのである。そうすると、演繹(形式)論理においては、自己言及のパラドックスに陥ってしまうし、帰納(実質)論理に従えば、確率あるいは蓋然性の世界でしか通用しなくなるため、理論的には、暗礁に乗り上げてしまう。このような理論的関心と、もう一つ「産業社会の秩序再編」という現実的関心からも自己組織性は重要な概念となってくる。「現在において普遍的ではないが将来においてそうなりうる可能性についての議論が要求されるところでは、仮説演繹的な現実認識よりも意味解釈的なそのほうが、真実を見きわめるうえで有効な場合が少なくない。」(九頁)と言うように、従来、社会システム論、機能主義、あるいは数理社会学の研究領域で活躍してきた著者が、新たに意味解釈的な認識論に入ってしまったところに、社会理論のフロンティアのおもしろさがある。

さて、著者は、「科学の定義を、《科学とは現象についての認識を存在に接続する理性手続きのことである》と考えることにしたい。」(二四頁)と述べる。言い換えると、「認識論と存在論を架橋するのが科学であり、その手続きが方法論である」し、



「科学とは理論（命題・法則）を経験につながる作業のことであり、この意味で認識の存在接続と表現できる」のである。そして、科学方法論を総合的に検討しながら、認識平面においては、仮説認識・観察認識・意味認識の三つが、存在様式においては、それぞれ反証可能性・検証可能性・了解可能性に対応し、それらを接続させる方法理性の様式が、それぞれ演繹法・帰納法・解釈法として「メソドロジの三角形」を形成している点が重要なポイントになっている。（方法モデル1参照）つまり、近代科学の方法理性は、普遍対特殊・一般対個別・抽象対具体といった二項対立を軸にして「位階序列」として構成されてきたが、自己組織性を扱う「変換理性」においては、演繹・帰納・解釈の各理性を同等の方法手続きとして相対化し、相互の対立と緊張を保存したまま各理性を自由に回転させる「変換理性」へと統合されているわけである。第一章で示された「メソドロジの型（リアリティ分割）・感性様式・論理様式などさまざまな構成要因が付加され、ウェーバー方法論の構造を経て、変換理性の方法モデルへと展開されている。

そして、実際の近代社会科学を支えてきた方法論について、「社会の自然科学をめざした実証主義と社会の理解科学をめざした解釈主義」の二つに大きく分類し、それらをそれぞれ第二章、第三章で詳細に検討しているわけである。つまり、「観察帰納法と仮説演繹法は実証主義の系譜から論理実証主義の登場

を契機として分化した。意味解釈法は解釈学に起源をもち、現象学を経由した存在の解釈学によって完成をみた。(一五頁)というわけである。従って、第二章、第三章では、通常の科学方法論、科学哲学で扱われている、古典的実証主義(コント、スベンサー、ミル及びデュルケーム)、論理実証主義(カルナップの検証主義対ポパーの反証主義、さらには、ディルタイの解釈主義、ウエーバーの方法論、フッサールの現象学と後期ウィトゲンシュタインの日常言語哲学、シュッツの現象学的社会学、ルーマンの意味の超越システム理論、ハイデッガー、ガダマーらの了解可能性としての存在などが次々と議論に登場してくることになる。ここで、逐一それらについて紹介することはできないが、結論的には、どの方法理性も二項対立の図式に乗って覇権を争っている限りでは、自己組織性への挑戦は挫折に終わることになる。つまり、帰納理性による自己組織性への挑戦では、帰納論理は斉一性原理を前提とするから、「変化のゼーション現象」において、旧ゼーションの終着と新ゼーションの始発は、扱えなくなってしまう。「将来、制度化されるかもしれないが、現在そうならない現象は、帰納法では誤差ないし例外現象でしかない。(五六頁)それでは、演繹法によって自己組織性を把握する場合はどうか。演繹法では、形式論理の世界であるから、論理のパラドックスによって、自己言及が不可能となり、「自己非決定の矛盾」に陥ってしまうのである。つまり、「形式論理は本来、自己組織の不可能性を背負いこんだ論理なのである。」

(五七頁)そこで第三の意味解釈法が重要となってくる。「社会の転換期にしばしばあらわれる、社会イメージの問いなおしや新しい秩序の模索などの試みは、おそらく意味の自省作用 (reflection) としての構想力に依存するしかない。ここでは普遍化認識や一般化認識はほとんど役にたたず、演繹理性や帰納理性は解釈理性に主役の座を明け渡すしかない。」(八四頁)ということになる。しかし、著者は、意味学派の中でも、古典的解釈主義から存在論を経由したハイデッガーやガダマーらの存在完成と了解可能性に注目して、意味の自省的解釈を、《意味の解釈を通じて経験を完成させ、これを了解可能な存在に接続する》(二二頁) こととしている。その観点からは、シュッツの現象学的社会学の「主観的解釈の公準」や「適合性の公準」は批判されることになるし、また「意味を存在によってではなく機能によって問うルーマンの社会システム論は、意味解釈法の純粋型にはなりえない。」(八三頁)としている。

そして、最後に「近代科学の理性がおこなってきた科学方法論の「対立の構図」を解体して、変換理性による「共存の構図」に組み立てなおすこと」(二三頁)こそが《方法モデル5》によって、メソドロジの回転と変換理性として位置付けられ、理性神話を脱構築していくことにつながるわけである。それでは、このような変換理性の方法論に基づいた「自省的機能主義の理論」とは、いかなるものであろうか、次に見ていくことにしたい。

(⇒)

第二部の理論篇は、次の三つの章から構成されている。

第五章 パラダイムの冒険

第六章 正統派の受難時代

第七章 社会理論の復活

この第二部で扱われている理論の「正統派」とは、戦後の五つのシステム・パラダイムを指している。「それらは、有機体論革命とシステム思考の導入を提唱した一般システム理論、情報理論を含むサイバネティクス、社会学の構造―機能主義、経済学における新古典派的総合をへた一般均衡論および文化人類学の構造主義である。」(四二頁)そして、戦後の社会システム論の展開を支えたのは、産業社会論・機能主義・自然主義のトロイカであった。しかし、一九六〇年代末から七〇年代に入つて、社会システム論を支えてきたトロイカにかけりが生じ始め、転機が訪れることになる。

そして、著者は、この八〇年代のパラダイムの混迷状況において、なにがこれまでの理論に不足してきたのかについて次のような見解を示している。「その一つが社会を意味システムとして把握する試みである。もう一つは社会システム論を基礎づける行為論の見なおしであり、人間行為の特徴である自省作用(reflexion)の社会システム論への組み込みの問題である。」(四八頁)そして、「自省作用を取り込んだ機能主義を、従来の機能

主義から区別する意味で、自省的機能主義 (reflexive functionalism)と呼ぶ」(一六六頁)として、機能主義再生の道を模索していくのである。

続く第六章においては、このような観点から、戦後に登場した社会理論の正統派を形成した先の五つのシステム・パラダイムが、なぜ自己組織性を有効に理論化できずに受難時代をむかえたのかを検討し、自己組織パラダイムへ向けての課題を探っている。これらについても、ここで詳細に紹介する余裕はないが、ここでは、ベルタランフィの一般システム理論、ウィーナーのサイバネティクス、近代経済学における一般均衡理論、レヴィーストロースの「無意識の精神構造」を基本テーマとした構造主義、そしてパーソンズの構造―機能主義と主意主義(voluntarism)の自己否定の問題などが取り上げられている。

そこで、自己組織性の観点から社会理論の復活を試みる最後の第七章へと移ろう。ここでは、行為論から始めて、構造や機能や意味の問題にいたるまで、社会理論を基礎づけている諸概念を包括的に組み立てなおす試みが展開されている。今日は、まず概念の交通整理から始めている。構造と機能と意味の三つの概念をそれぞれ、記述概念と説明概念とに分けて定義する。結論を先取りして問題の核心にせまると次の四つにまとめられる。

(1) 構造を説明概念として用いると、ルール (規則)、記述概念として用いると、パターン (型) となり、機能の場合にはそれぞれ、コン

ト、ロール(制御)とパフォーマンス(成果、意味の場合はそのれ、それ、フレクション(自省)とディファレンス(差異)となる。

(2)自己組織理論を構築するためには、構造や機能や意味の概念を説明概念として使用する必要があること。すなわち構造はルールとしての構造、機能はコントロールとしての機能、意味はリフレクションとしての意味に限定して用いる。

(3)記述概念としてのパターンとパフォーマンスとディファレンスは、経験的現実にかかわる存在、カテゴリー、の概念である。

(4)ルールとしての構造、コントロールとしての機能、リフレクションとしての意味は、社会現象へのアプローチ法として究極的には同等の概念であり、ただその観点が違っているだけである。(二三九―二四八頁)

従って、これら三組の対概念は、第一部で検討したメソドロジの三角形に対応する理論の三角形であり、自己組織理論を基礎づけている。そこで、機能を意味によって問う自省の機能主義は、構造と意味の螺旋運動として理論化されることになる。これが、システム(構造・機能・意味)の螺旋運動としてモデル化され、(理論モデル1)へと結晶化されている。

そこで、今度は行為次元における各概念の交通整理が必要となる。

(1)行為類型の中には、慣れ親しんだ慣習によって規則に従うこととのルーティン化に基礎をもつ慣習的行為、目的達成のため最適な手段を選択する合理的行為、そして例えば行為の意

図せざる結果がもたらされたとき、もとの行為に立ち返ってなぜそうなのかを問いなおす行為、つまり自省の行為が含まれる。

(2)作用様式から見ると、慣習的行為は規則に従うことのルーティン化であり、合理的行為は目的へ向けての自己制御、自省的行為は意味を問いなおす自省作用である。

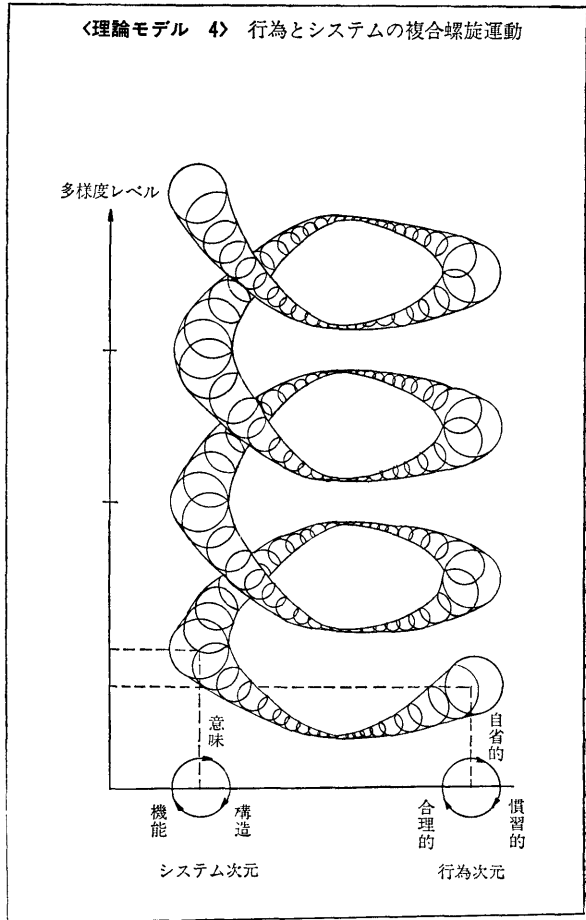
(3)行為図式においては、慣習的行為は制度や価値の伝統への帰属が優位した行為、すなわち伝統―帰属図式にもとづく行為であり、合理的行為は目的―手段図式が、自省的行為は意味―自省図式が優位する行為である。

(4)従って自省的行為のモデルは慣習的行為・合理的行為・自省的行為の三つからなり、それぞれの行為類型はシステム次元の構造・機能・意味に対応する。(二六四―二六五頁)

そこで、システム次元の構造・機能・意味が螺旋運動をなしたのと同じように、行為の三類型も螺旋運動をすることになる。ルーティン化が優位する慣習的行為は自己制御が優位する合理的行為によって問われ、合理的行為は自省作用が優位する自省的行為によって問われる。そして自省的行為は今度は慣習的行為に立ち返る。つまり、(理論モデル2)に見られるように、行為(慣習的・合理的・自省的)の螺旋運動は、平面的ではなく、一巡するとより高次の位相へと移る螺旋運動になっている。

このように、自省的行為と自省的構造をモデル化することによって、自省的機能主義の理論は、いよいよ最終局面として

〈理論モデル 4〉 行為とシステムの複合螺旋運動



「行為とシステムの複合螺旋運動」が提示されることになる。つまり、システム次元の螺旋運動と行為次元の螺旋運動が相互に浸透しあって連結され、この連結がまた一つの螺旋運動を形成するという意味で複合螺旋運動なのであり、これによって構造の自己言及性が定式化される。(理論モデル4参照)この図からもわかるように、システム次元の螺旋運動がまるごと行為次

螺旋運動に変換されることをあらわしている。以上が、複合螺旋運動のモデルであり、これを著者は、社会理論復活の鍵となる〈社会理論のプロト・モデル〉と位置づけている。

社会理論の復活を意図したこの「自己組織性」は、多くのこ

元に入り込むわけではない。個人ごとに社会の縮小コピーをもち、この社会の内部イメージに反応して行為の螺旋運動をおこなっている。つまりシステム次元の螺旋運動が縮小されて行為の螺旋運動に変換されるのである。また、システム次元の螺旋運動がいったん縮小されたのち、行為次元で再び拡大されているのは、多数の行為者の螺旋運動がシンクロナイズして、一つの大きな螺旋運動になっていることを示している。そして再び行為の螺旋運動が縮小して先細りになる。これは、行為次元の運動が凝縮されてシステム次元の

とを学ばせてくれる。もちろん、それぞれの読み手にとっては、もう少し論じ尽くしてほしい部分もあれば、かなり繰り返し論議になってしまっていると感じるところもあるだろう。最後に、筆者なりの疑問点を付け加えてみたい。

まず第一に、「二項対立」から「三角形」への変換モデルが、方法の部、理論の部双方に関係する一貫した論理となっているが、これは一体なにを意味しているのだろうか。確かに仮説演繹法対観察帰納法といった科学方法論上の二項対立に対して、意味解釈法の持っている重要性はもう一つの頂点になりえるし、構造か機能かという議論に対して、意味の持つレベルを加えることによって局面が大きく変わってくることは理解できる。しかし、意味の世界は、果たして演繹・帰納や構造・機能と同様な点・線・面という二次元的、あるいは三次元的空間に収まるものなのだろうか。今田は、意味を説明概念としてのリフレクシオンと記述概念としてのディファレンスに分けるが、意味の世界は、もう少し混沌とした球面構造を持っているのではないだろうか。山田慶児は『混沌の海へ』（一九七五年）の中で、社会変動を扱う上での流動的な三極構造のモデルを提起していたが、そうしたカオス性を持った三極構造として、今田理論を組み換えていくことはできないだろうか。つまり、意味の次元、自省作用の次元が構造と機能を飲み込み得るような動態的なモデルである。

第二に、今田自身が述べているように、「構造・機能・意味

の三つにたいするアプローチ法が、それぞれ演繹・帰納・解釈の各方法と対応関係にあるのではないかと思う」。(二六頁)という点である。これについては、ぜひ今後の詳細な検討を期待したいが、著者がメソドロジの三角形と社会理論のプロト・モデルを強調するあまり、今回の著作では、何故「自省の機能主義」なのか、何故「機能主義の不滅と再生」なのかの根拠が多少弱くなったような気がする。確かに、著者が機能主義理論と格闘する中から、内在的批判として産まれたということはわかるが、構造主義から入っていても意味学派から入っていても同様であるのだろうか。もし、同様であるならば、機能主義の不滅と再生とは一体何なのだろうか。

ともあれ、この今田理論が、「自前の理論をつくって本音の議論をすべき時代」(まえがきiv頁)にふさわしい社会理論であることは間違いないだろう。

(創文社・一九八六年・三四頁・三五〇〇頁)

有 未 賢